

地方大学と国際化のゆくえ

村上清史*

富山と石川が連携した「ほくりく健康創造クラスター」の第3年度が始まった。知的クラスター第2期事業は、昨年末の事業仕分けで「廃止」と判定され、本事業により40名を超える雇用されている特任教員、PDや技術者を不安に陥れた共に、早期発見・予防をめざすプロジェクトに積極的に関与している地域の方々にも深刻な危惧を抱かせた。この判定に対して各方面から要望と批判が表明され、結果として知的クラスターを含む地域科学技術振興関連事業の継続分は「地域イノベーション事業」として担保された。5年計画の本事業では、各プロジェクトに毎年2~6千万円の研究費を充当しており、優れたシーズを実用化につなげる研究開発と事業化で良い成果を収めることが求められている。

これらの大型プロジェクトを担うのは、地方各大学の代表的な研究者やグループであり、地方大学では例外に属する。多くの研究者は、恒常的な研究費が年々厳しくなり、科研費などの獲得がなければ受け入れる院生数や研究テーマの選択にも財政を考慮しなければならない現状がある。院生数と発表論文数は強く相関しているため、研究費の枯渇と院生数の減少は研究活動の低下をもたらし、科研費の採択を一層困難にする「負のスパイラル」を招く。この現象は、過去5年間科研費等の競争的資金を獲得していない教員比率などで良く示されている。負のスパイラルに入った研究グループの中でも、若手研究者への影響が極めて深刻であり、独立した職を将来得る可能性が低くなり、研究者としての生き残も危ぶまれる。近年進む地方大学の疲弊と危機について、既に学術会議や総合科学技術会議が、科学技術関連経費の「選択と集中」の負の側面として指摘している。この中であって地方（国立）大学は、特色ある研究をさらに重点的に強化し、文科省などによる戦略的助成事業の採択をめざして、多くの努力を試みている。

昨年末、金沢大附属病院の地域医療特任教授と教員の随員として、四川大学に訪問する機会があった。金沢大学と旧中華西医科大学との間に始まった交流は、統合四川大学に引き継がれ、留学生や教員の交流と共同研究が十数年来継続している。今回は、金沢大医学研究科恒常性制御講座に留学を希望する修士院生の面接と医療技術交流を目的にしていた。6,000ベッド超を擁する附属病院を中心にした四川大学医学系キャンパスの変容は激しく、副医学部長が主導する西洋先進例を積極的に取り込んだ医学教育の改革と、ファントムを用いた種々の実技研修器機や近代的な手術施設・器具を装備した模擬実習手術室など施設面の改善は目をみはるものがあった。教育改革の成果を実際に感じさせたのは、今回の面接に応募した7名の修士院生であった。突然の求めに応じて、候補者は意欲的に将来と留学目的を語り、臆することなく流暢な英語で質疑に答えていた。これは、講演には中国語の通訳が必要で、院生の質問が殆どなかった1998年の初回訪問時とは隔世の感があった。

この面接で選抜された1名の留学生がこの4月金沢にきて、秋にもう1名が加わる。彼女らにとって、金沢大学はどのように映るのだろうか、博士課程で期待どおりの成果を上げられるだろうか、院生と英語でのコミュニケーションが取りにくい悩みが今後解消されるだろうか。地方大学の国際化には、大学のシステム改革と共に、教職員や学生の地道な協力と努力が必要である。「日本留学の体験が日本の大学に対する不満や悪印象を増やしている」ことのないような地方大学の国際化が進むことが望まれる。しかし、何よりも指導する研究者が元気でなければ、留学生にとって魅力的な「場と時間」を提供することはできない。そのためにも、研究者への恒常的な教育研究費が増えボトムアップ資金の採択率が高くなることを、国際化のためのより基本的な環境整備であることを強調したい。

*本会評議員、ほくりく健康創造クラスター研究統括、金沢大学名誉教授